研究ノート

音楽科と英語科による横断的指導に関する研究
－英語の歌の歌唱指導を通して－

○清永千裕*1　清永克己*2

キーワード：音楽科、英語科、横断的指導、英語の歌、歌唱指導

１．はじめに

１．１　研究の目的

中学校の英語の教科書では、英語の歌が巻末等に掲載されている。現在使われている東京書籍『New Horizon』では、1年生で4曲、「Sing」、「Hello, Goodbye」、「Take Me Home, Country Roads」そして「Sailing」が、2年生で2曲、「Stand by Me」と「I Just Called to Say I Love You」が載っている。それら6曲は英語の歌詞のみの掲載で、楽譜は載せられていない。

英語の歌は、教育的効果を高める学習教材と考えられている。中嶋（2010）は、その効果を8項目挙げている[1)]。

1. 英語に対して親近感が生まれ、英語学習への意欲が高まる。
2. 大きな声で歌うことで、心が解放されクラスの雰囲気がよくなる。
3. 歌は読み取りの自主教材となる。
4. 習っている事項の復習や、これから習う単語の予習になる。
5. 教科書に出てこない生の英語表現に触れることができる
6. 音読練習に格好の教材となり、大きな声を出す習慣がつく
7. 歌の中で、それぞれの国の文化が教えられる。
8. 歌詞を参考にして自己表現（作詞）につなげることができる。

また、それ以外に次の効果があると付け加えている[1)]。

・歌は右脳を使うので、リズムと音と言葉が結びつき、定着しやすい。
・毎回歌うので、進歩する過程が自分でわかる
・「歌えるようになりたい」という強い目的意識を持って、集団で楽しく音読練習ができる。
・リンキングや脚韻などについて学べる。
・音読では暗唱できるまで繰り返し練習することが大切だが、歌は肩ひじはらずに楽しく暗唱できる。

英語の歌を授業で活用することは、小学校課程から大学における教育まで広く取り入れられ、様々な研究が行われている。

小学校課程の研究では、ウォルシュら（2019）は英語の歌の語彙を理解させることが楽しく歌を歌うことにつながり、英語のアウトプットに繋がると考えた[2)]。名渕（2022）は児童が高学年になると英語の歌を歌いたくなる傾向があることに注目してその改善策について研究を行なった[3)]。髙橋ら（2021）は小学校の外国語活動と音楽科の教科間の横断的な指導による学習効果と指導法について研究を行なった[4)]。

中学校課程と高校課程では、須田（2016）は中学校の授業で、英語の歌と映画を使った授業実践の実態とその学習効果についてアンケート調査を行なった[5)]。甲斐（2018）は高校1年生を対象として中学校の授業で扱われた英語の歌についてその曲名と学習効果につ

*1　東京二期会
*2　至誠館大学　現代社会学部

いて研究を行なった[6]。時得ら（2009）は、中学校における外国語科（英語）と音楽科が教科間で連携して指導することで生徒の興味・関心や学習意欲を高めることにつながり学習の効果があったことを明らかにした[7]。

大学生を対象として、吉田ら（2023）や宮腰（2021）は小学校教員養成課程の教科指導法における発音指導に英語の歌を使い、また英語科と音楽科の視点から研究を行なった[8][9]。中田ら（2022）は大学の教科書で扱われた英語の歌やZoomなどを使っての歌唱指導を行なった[10]。吉村（2017）、今村（2020）は大学の授業で英語の歌を使い、英語学習への動機付けに繋げようとした。英語の歌は同じ単語や分布の繰り返しが多く難しくないことで、教育効果を高められると説明していた[11][12]。

瀧口（2020）は英語の歌を使った学習指導の意義と課題についてその歴史と学習効果について研究を行なった[13]。

しかし、その研究は英語科の視点からの研究であり、音楽の側面からの指導につながるような研究は少ない。歌詞は英語科との関わりが深いが、歌の指導はその専門である音楽科の協力は欠かせない。小学校課程での外国語活動と音楽科との教科間の連携に関して、高橋ら（2021）は音韻構造と英語音声教育の2分野で研究を行なっている。しかし、外国語活動という範囲内での研究で英語の歌詞についての研究や韻律、イントネーションと楽譜との関係までは踏み込まれていない[4]。時得ら（2009）も歌唱指導の研究は十分に行われていなかった[14]。

教科間の横断的視点に立った指導に関しては、中学校学習指導要領総則「第2教育課程の編成」の「2教科等横断的な視点に立った資質･能力の育成」の中で、「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図る」と述べられている[15]。

さらに外国語（英語）の「指導計画の作成と内容の取扱い」では次のように述べられている。

言語活動で扱う題材は、生徒の興味・関心にあったものとし、国語科や理科、音楽科など他の教科等で学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなど工夫すること[16]

英語科と音楽科が限られた授業時間数の中で、それぞれの領域で、特質を生かし連携して指導ですることで、1科目だけでは達成できない高い学習効果が得られると考えた。本論文では、英語を題材とした歌を、英語の歌詞や曲想を理解し、きれいな響きで歌うにはどうすればいいのかという歌唱指導の取り組みについて、音楽科と英語科が横断的指導をどのように進めたらよいのかについて、中学校の教材を使って研究を行なった。

２．中学校の教科書で扱われる外国語の歌

教育芸術社の1年から3年までの教科書『中学生の音楽』では、歌唱指導で学習する外国語の曲として、次の曲が掲載されている。

『中学生の音楽1』では「主人は冷たい土の中に」「Edelweiss」が、『中学生の音楽2・3上』では「サンタ　ルチア」「Joyful, Joyful」が、『中学生の音楽2・3下』では「Amazing Grace」「帰れソレントへ」「Let It Be」の7曲が歌唱教材として掲載されている。「サンタ　ルチア」と「帰れソレントへ」はイタリア歌曲で、「主人は冷たい土の中に」や「Edelweiss」、「Joyful, Joyful」、「Amazing Grace」、「Let It Be」は、英語の歌である。

「主人は冷たい土の中に」はフォスターが作曲した歌曲であるが、教科書に日本語の歌詞は掲載されているが、英語の歌詞は掲載されていない。「Joyful, Joyful」は日本語の歌詞と英語の歌詞の両方が掲載されている。『中学の音楽2・3下』に掲載された「Amazing Grace」、「Let It Be」は英語の歌詞だけが付けられて、日本語訳の歌詞は掲載されていない。

ビートルズに関する楽曲は、英語の教科書『Sunshine』開隆堂、『New Crown』三省堂、『New

Horizon』東京書籍でも繰り返し掲載されている。2000年以降の中間期の教科書改訂を含めて、「Hello, Goodbye」は10回、「Imagine」は5回、「Let It Be」は1回掲載されている。そこで、英語の教科書と音楽の教科書の両方でビートルズの楽曲は扱われていることから、本研究では現行の教科書の『中学の音楽2・3下』で教材として扱われている「Let It Be」を使った。

３.「Let It Be」に関する考察

「Let It Be」の歌唱指導について考える。歌唱指導では、歌詞を理解させ、正しい発音に注目することが大切である。教育芸術社が提案した年間学習指導計画によると、「Let It Be」は3学期の学習単元で「帰れソレントへ」と同じ時期に学習するように提案されている[17]。年間授業時間35時間の中で、2時間がその2曲を指導する時間に当てられている。2時間といっても、授業では、1時間の中で歌唱指導、器楽、鑑賞を取り混ぜての授業になるため、2時間、2回だけの授業で終わるわけではない。総合して割り当てられた時間での指導ということになる。

３．１.「Let It Be」の学習の目標

歌唱題材「Let It Be」のページで書かれている学習目標は、「曲の雰囲気を生かして英語の歌を歌おう」[18]である。さらに、「英語の語感を生かした旋律やリズムに注目しながら、曲にふさわしい表現を工夫して歌いましょう」と書かれている。また、教育芸術社が提案している題材の目標、題材の評価基準は次の通りである[17]。

題材の目標

声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりについて理解するとともに、それらを生かした曲にふさわしい歌唱表現を創意工夫して歌う。

題材の評価基準例

知識・技能

［知］　声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりについて理解している。

［技］　創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声、言葉の発音、身体の使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。

思考・判断・表現

［思］　リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、曲にふさわしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもっている。

主体的に学習に取り組む態度

［態］　声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わりに関心をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

これらのことから、「Let It Be」では、次の事が題材の目標として考えられる。

1.「Let It Be」の歌詞の内容を理解し正しい発音で、心情や曲想にふさわしい音楽表現を工夫して歌う学習に主体的に取り組む。
2.「Let It Be」のリズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、曲にふさわしい音楽表現を創意工夫する。
3.「Let It Be」の歌詞や曲想を生かした歌い方をするために必要な発声、発音、体の使い方を身につけて歌う。

３．２.「Let It Be」の歌詞の分析

「Let It Be」の歌詞について、使われている単語の文字数、歌詞に出てくる「Mother Mary」について、調べ

た。

３．２．１．使用されている単語

「Let It Be」の歌詞について分析した。インターネットで単語についてReadability Formulasを使って分析すると表1のような結果が出た[註1]。

表 1「Let It Be」の歌詞で使われている単語の分析結果

単語総数	220
単語の種類	62　(28%)
繰り返し使われた単語数	158　(72%)
１語中の文字数	3.4
全体の音節数	256
2 音節語の数	31　(14%)
1 音節語の数	187　(85%)
3 音節以上の単語数	2　(1%)

注）（　）内の数値は全体の中での比率を示している

単語の種類は、以下の通りである。

単語の種類 : when, I, find, myself, in, times, of, trouble, mother, Mary, comes, to, me, speaking, words, wisdom, let, it, be, and, in, my, hour, darkness, she, is, standing, right, front, whisper, the, brokenhearted, people, living, world, agree, there, will, an, answer, for, though, they, may, parted, still, a, chance, that, see, night, cloudy, light, shines, on, shine, until, tomorrow, wake, up, sound, music

中学校 3 年生で学習していない単語は、wisdom(2994)、darkness(3326)、brokenhearted の 3 語程度だと考えられる[註2]。（　）内の数字は『新 JACET8000』の数値である [19]。（　）の数字が大きいほど、使われる頻度が少なくなり、難易度が高くなる傾向があることを示している。

wisdom は 3000 番に近い単語であり、高校で学習する機会の高い単語ということになる。brokenhearted は、broken と hearted の 2 語からなる合成語で、過去分詞の形容詞的用法の語と考えると理解しやすくなる。

また、「Let It Be」で使われた単語の中で繰り返し使われた単語とその回数は、以下の通りである。(　)の数字は、繰り返された回数である。

繰り返し使われた単語と回数 : when(3)、I(2)、in(4)、of(10)、mother(2)、Mary(2)、comes(2)、to(3)、me(4)、speaking(3)、words(6)、wisdom(6)、let(31)、it(31)、be(35)、and(3), is(4)、whisper(3)、the(4)、there(6)、will(5)、an(4)、answer(4)、they(2)、still(2)、a(2)、that(2)

「Let It Be」では、理解に苦しむような難しい単語は使われていない。むしろ、英語学習を始めたばかりの学習者にも分かりやすい単語で曲が作られていることがわかる。さらに、繰り返し使われた単語は、158 語で全体の 72%という高い比率で使われ、比較的取り組みやすい曲だということがわかる。

３．２．２．使われている単語の文字数

次に「Let It Be」で使われている単語で、文字の数が全体平均の 3.4 文字以上の単語と回数について調べた結果は、次の通りである。

1 語の文字数が平均 3.4 文字以上の単語と回数 : myself(1), times(1), trouble(1), mother(2), comes(2), speaking(3), words(6), wisdom(6), darkness(1), standing(1), right(1), front(1), whisper(3), brokenhearted(1), people(1), living(1), world(1), agree(1), there(6), answer(4), though(1), parted(1), still(2), chance(1), night(1), cloudy(1), light(1), shines(1), shine(1), until(1), tomorrow(1), sound(1), music(1)

英語に限らず、アルファベットで単語が構成される言語の場合、1単語中の文字数が増え、長くなるほど単語は、語幹に接頭辞や接尾辞などが付き、意味概念が

深くなり難しくなる傾向がある。さらに、この中で3音節以上の単語はbrokenhearted, tomorrowの2語だけで、全体の1%で、全体の語数が220語であることを考えると、極めて少ない語数、比率であることがわかる。

３．２．３．使われている英文についての分析

歌詞に使われている英文の文法事項は、中学校3年生の英語の授業で学習する内容で書かれている。例えば、次の歌詞である。

And when the brokenhearted people living in the world agree, there will be an answer, let it be.

この文は、接続詞whenを使った、復文である。また、when節の主語であるthe brokenhearted people living in the worldには、過去分詞brokenheartedと現在分詞livingが使われている。現在分詞や過去分詞の形容詞的用法は、中学校3年の英語の教科書で学習する内容であり、『New Horizon 3』では2学期末に学習する文法項目である。

しかし、Mother Mary comes to me, speaking the words of wisdomで使われているspeakingは、主文を修飾して説明する分詞構文が使われている。一連の出来事が起こっていることを補足的に説明する副詞的な働きをする分詞の用法だが、ここでは文法的な細かい説明をせずに、日本語訳をつける程度で十分である。

３．２．４．「Let It Be」の歌詞「Mother Mary」について

この歌詞の中でMother Maryは、重要な役割を持った単語である。「Let It Be」のMother Maryはよく聖母マリアだと言われているが、”zosaneigo”は次の記事の中で、Motherはポール・マッカートニーの母親のことであると紹介している[20]。

> Let it be is one of my favorite Beatle songs. It was written by Paul McCartney in 1969. It begins with Paul saying how when he finds himself in times of trouble, "Mother Mary" comes to him. I had always thought that Mary means the virgin Mary, the mother of Jesus. But Paul's mother was also named Mary, and she died when he was a young boy. Paul has said in interviews that when he wrote the song he was thinking about his mother.

この記事から、「Let It Be」の Mother Mary は聖母マリアではなく、作詞者のポール・マッカートニーが 14 歳の時に亡くした母親だということになる。また、”zosaneigo”は、同じようなことをイギリスのラジオ局 RadioX のインタビュー記事でも紹介している[21]。

> The Liverpool legend explained: ”I had a dream in the sixties where my mum who died came to me in my dream and was reassuring me, saying: ‘It’s gonna be OK. Just let it be …’”
>
> McCartney’s mother was also named Mary, which has been cited as an inspiration for the “Mother Mary” lyric.

しかし、同じ記事の中で、Mother Mary が聖母マリアを示しているかと問われた時、それはファンの解釈に任せるとも言及しており断定まではしていない[22]。

また、”Let It Be”という表現の意味について、チェイス（2004）は次のように紹介している[22]。イタリック体は筆者が付けたものである。

> In the song Mary comes like an angel whispering to him these wise words-- let it be. *"Let it be" means let go, relax, don't worry about your troubles*. These are words of comfort, reminding us not to think about sad things too much, to accept the bad things that have

happened that we cannot change.

「Let it Be は、行かせること、リラックスすること、トラブルについて悩まないこと」と”zosaneigo”で訳している[20]。

３．３．「Let It Be」の曲についての分析

曲の構成は旋律の形式から、AとBに分けられる。4連の構成であるが、第3連は繰り返しである。第1連、第2連、第4連の6行目までがAであり、その後のLet it be, let it be, let it be, let it beからがBとなっている。とても分かりやすい音楽構成となっている。

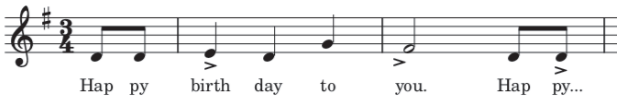
また、「Let It Be」の歌詞を、音程をつけずに音読した時、繰り返し、繰り返し読んでいると、自然に楽譜の旋律に沿ったような音となる。それだけ馴染みやすい曲ということになる。さらに、音読を重ね、意味の理解が深まるにつれて、文の強弱も譜面に添うように生まれてくる。

３．３．１．アウフタクト(Auftakt：弱起)の曲

「Let It Be」は、4分の4拍子で、アウフタクト（弱起）で始まる曲である。窪薗（1998）は、「高さアクセントや強さアクセントの違いは音楽の楽譜の上に現れる。音楽では小節の初めの音に心理的な強さが置かれるために、英語のように強さアクセントを有する言語では、強勢を持つ音節しかこの位置に生起することが許されない。 ― 中略 ― もともと強勢を持たない語が歌のはじめにくる場合には、その弱音節を前の小節に追い出して、強勢のある音節を小節の初めと一致させようとする。このような曲を弱起の曲と言うが、英語にはこの種の曲が非常に多い」と述べている[23]。

アウフタクトで書かれた曲の代表的なものは、「ハッピーバースデイ　トゥユー」である。

譜例1



譜例1の最初のHappyがアウフタクトで不完全小節である。このようにアウフタクトは、曲の助走をつけ、伝えたい意味の語からメロディックに表現し、演奏が単調にならないようにすることができる。また、4拍子で演奏されるため、“Let it be”と歌われる部分を除いてこの歌詞に拍子を合わせていくと、次の語に強拍が置かれることが分かった。太字が強拍の置かれる語である。

When I **find** myself in times of trouble
Mother Mary comes to me
Speaking words of wisdom, Let it be,
And **in my** hour of darkness
She is **standing** right in front of me
Speaking words of wisdom, Let it be.
Let it be, let it be, let it be, let it be,
Whisper words of wisdom, Let it be.

And **when** the brokenhearted people
Living in the world agree
There will be an answer, Let it be.
For **though** they may be parted there is
Still a chance that they will see
There will be an answer, Let it be.
Let it be, let it be, let it be, let it be,
There will be an answer, Let it be.
Let it be, let it be, let it be, let it be,
Whisper words of wisdom, Let it be.

And **when** the night is cloudy
There is **still** a light that shines on me
Shine until tomorrow, Let it be.

I **wake** up to the sound of music

Mother Mary comes to me

Speaking words of wisdom, Let it be.

Let it be, let it be, let it be, let it be,

There will be an answer, Let it be.

Let it be, let it be, let it be, let it be,

Whisper words of wisdom, Let it be.

動詞は4語 find、wake、shine、whisper(3)、名詞は1語 Mother(2)、副詞は still(2)、there(4)の2語と副詞句 in my、接続詞は2語で though、when(2)、現在分詞は living、standing、speaking(3)に強迫が置かれていることが分かる。(　)の数字は、繰り返された回数である。これから読み取れるように、文が始まる語で第1音節に強拍が置かれている。

アウフタクトで作曲されたことで「Let It Be」は、and、forなど比較的に詩として重きを置かれない単語から始まらないように作曲されている。同じ接続詞 when でも、When I find myself のwhenとand when the brokenhearted people、とAnd when the night is cloudyでは、歌詞の重要度が違っていて、歌詞に込められたメッセージがより曲に乗って明確に表現されるように曲が流れていることが分かる。

４．英語と日本語の発音の違い

４．１　日本語と英語の子音、母音の発音の違い

次に英語の発音についてみていきたい。音声生成について山﨑（2022）は、「欧米系の言語は子音文化といわれるのに対し、日本語は母音文化である」と述べている[24]。英語と日本語との音の違いを、音素記号（International Phonetic Alphabet (IPA)）を使って説明すると次のようになる。

堀田（2012）は、英語の音素は、母音が20と子音が24である。英語のアルファベットは26文字であると述べている[25]。

母音字 a、i、u、e、o の 5 文字を除くと、残りの 21 文字は子音字となるはずだが、発音される子音は 24 で、文字と音素が一対一で対応していない。IPA で表すと次のようになる[26]。

英語の音素一覧

母音（vowel (V)）

/iː/, /ɪ/, /e/, /æ/, /ʌ/, /ɑː/, /ɒ/, /ɔː/, /ʊ/, /uː/, /ɜː/, /ə/, /eɪ/, /aɪ/, /ɔɪ/, /əʊ/, /aʊ, ɑʊ/, /ɪə/, /eə/, /ʊə/

子音(consonant (C))

/p/, /b/, /t/, /d/, /k/, /g/, /ʧ/, /ʤ/, /f/, /v/, /θ/, /ð/, /s/, /z/, /ʃ/, /ʒ/, /h/, /m/, /n/, /ŋ/, /l/, /r/, /w/, /j/

調点と調音様式を示したものが、図 1 である[25]。

調音様式		調音点						
		両唇	唇歯	歯	歯茎	歯茎硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声	/p/			/t/		/k/	
	有声	/b/			/d/		/g/	
摩擦音	無声		/f/	/θ/	/s/	/ʃ/		/h/
	有声		/v/	/ð/	/z/	/ʒ/		
破擦音	無声					/ʧ/		
	有声					/ʤ/		
側音	有声				/l/			
鼻音	有声	/m/			/n/		/ŋ/	
半母音	有声	/w/			/r/	/j/	(/w/)	

図 1　調点と調音様式

一方日本語は、母音が 5、子音が 16 ある。さらに 3 つの特殊音素がある。

日本語の音素一覧[25]

母音（V）/a/, /i/, /u/, /e/, /o/, /j/, /w/

子音（C）/k/, /s/, /c/, /t/, /n/, /h/, /m/, /r/, /g/, /ŋ/, /z/, /d/, /b/, /p/

撥音音素/N/、促音/ T/、長音/R/

英語の子音 24、母音約 15

声帯に適度な緊張が存在し、声門の上下に圧力差が保たれるなどの条件が整うと、呼気流が咽頭を通過する際に声帯が周期的に振動し、この振動によって声（voice）が生成される。音の高さは声帯の振動数であ

る基本周期数によって決められる。そして、図1に示した調音点と調音様式によって様々な音が生成される。一般に音節は、声帯の振動を伴う母音（V）と鼻音/m/、/n/、側音/l/によって形成される[26]。

日本語の音節は、子音音素が0個あるいは1個と母音音素からなる開音節である。VあるいはCVである。撥音節VN「オン」、CVN「カン」、CJVN「キャン」、促音節Vq「アッ」CVq「サッ」、NCjVN「キュッ」の閉音節構造のものもある。しかし、閉音節の語はそれほど多くはない[28]。

一方英語では、VあるいはCVの開音節の語やCVCの閉音節の単語が多く見られる。

前川（1998）は、音のきこえの大きさは、調音様式の関係で、次の順番で大きくなると述べている[27]。

閉鎖音＜摩擦音・破擦音＜鼻音・側面音＜母音

日本語では、開音節であるために母音が大きく響く。一方英語は子音の発音をはっきりとさせるために、しっかり、明確に発音して歌わなければ意味のある単語として聞き取れない。しかし、子音はあくまで「母音」と一体化して音を発し、その役割を果たすという特性を持っている。声帯の振動を伴わない子音だけでは、音程は定まらない。子音より母音が強く発音されると英語の場合、単語が分かり難く、意味がはっきりと伝わらないということになる。英語の歌では、摩擦音、さらに声帯の振動を伴わない無声音の子音/p/、/t/、/k/で始まる語では、音符通りの高さの語を発する時、その子音が当てられた音符の音をはっきりと発声できるように意識し、準備しておくことが大切である。

内山（2001）は、日本語母語話者が対立しない英語子音音素のペアを聞いた時の弁別力は、英語の音素とこれに対立する日本語の音素間の聴覚的類似度の高さ、低さに関係があると説明している[28]。つまり、英語の/b/と/v/は日本語の「ビ」「ブ」に、/l/と/r/は「ラ」「リ」に、/f/と/h/は「フ」に、/s/と/ʃ/は「シ」と捉えていると述べている。英語の歌を英語の発音で歌うためには、指導過程でそれらを意識させる必要がある。

４．２．英語の「音節(syllable)」と日本語の「拍(mora)」の違い

歌唱において、英語の「音節（syllable）」と日本語の「拍（mora）」の違いも理解していなければいけない項目である。米谷（2022）は日本人のドイツ語歌唱とオーストラリア人による日本語歌唱の指導経験からそれぞれの言語から生じる違いをはっきり理解させることの大切さを述べている[29]。「音節」は音の長さを母音の数で数えるのに対し、日本語の「拍」は「1つの子音と短母音を組み合わせたもの」であり、一つの音符に歌詞が重なった時、英語と日本語ではその音の長さが違っている。例えば、let it beであれば、英語では/letɪ(t)bɪ/となるが、日本語では/le-to-ɪto-bɪ/となり、日本語の方が長くなってしまう。心情や曲想にふさわしい音楽表現をすることができるように、英語らしく歌うためには、正しく発音、そして英語の「音節（syllable）」と日本語の「拍（mora）」の違いに注意させなければならない。

５．歌唱指導

李（2017）は、英語は子音だけを出す頻度が高いため日本語よりも声帯を震わせて発生頻度が低く、英語母語話者は頻繁に腹式呼吸をしていると述べている[30]。このことは、歌唱指導するときの呼吸指導などに共通する。

音楽の歌唱指導で髙橋（2019）が具体的に説明している「大きな声で」「出だしを揃える」「言葉を明確に」などは、そのまま英語の音読や発声法にも応用できる内容である[31]。本論文の4.1で触れたように、英語では弁別特性が高い子音をはっきりと発声できるように意識し、準備をしておくことが大切である。

中学校学習指導要領では、「内容」の中で各学年の歌唱指導について記述されている。第1学年の内容の

「A 表現」で歌唱について、次のように述べられている[32]。

A 表現

(1) 歌唱の活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら，歌唱表現を創意工夫すること

イ 次の（ア）及び（イ）について理解すること。

（ア）曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わり

（イ）声の音色や響き及び言葉の特性と曲種に応じた発声との関わり

ウ 次の（ア）及び（イ）の技能を身に付けること。

（ア）創意工夫を生かした表現で歌うために必要な発声，言葉の発音，身体の使い方などの技能

（イ）創意工夫を生かし，全体の響きや各声部の声などを聴きながら他者と合わせて歌う技能

楽曲のテーマや曲の構造、歌詞に対する理解、歌詞を表現する言語の特性と曲種にふさわしい発声法に対する理解、創意工夫して表現するのにふさわしい具体的な発声の仕方や各声部との協働により、響きを作り出すための技能に対する理解を深める指導が、歌唱指導で必要と読み取ることができる。

橋本（2019）は歌唱指導について、次のように述べている[33]。

歌曲は、歌詞の心を表し、作曲家がリズム、メロディー、和音で書き表したものである。美しく豊かな声で、歌詞の内容を豊かに表現することにより、その曲に生命力を与えられることになる。

そのためにも、作曲者や作曲家の思想、感情を十分に自分のものにし、歌詞の内容を深く理解することは言うまでもなく、楽譜に記入された表現上の全ての指示を深く掘り下げて研究し、創造していく必要がある。

良い演奏は、リズムも音程も正確であると同時に、曲に生命を盛り込み、その感情を高度に表現することが可能になる。

橋本は大学での指導を念頭に置いており、中学校の音楽の授業でここまで高い芸術性までを求めて指導することは現実的ではない。しかし、本論文の3で触れた「Let It Be」の歌詞やその歌詞に込められた意味、日本語と発音の違いに対する理解を深めることで音楽表現を豊かにすることができる。

６．まとめ

本研究では中学校の音楽の教科書で扱われるビートルズの「Let It Be」を題材に取り、音楽科と英語科がどのように指導したらいいのかを分析した。

中学校では、英語らしい正しい発音で歌う指導が求められる。音楽科の教材として扱われる「Let It Be」の学習に対する割り当ての時間数は、2時間である。しかし、1時間の授業では歌唱指導だけではなく、器楽、鑑賞の教材も指導するため、短い時間内で「Let It Be」の英語の歌詞の意味を理解させ、正しく発音できるように指導し、創意工夫をさせた歌唱をさせるというのは、かなり厳しい制約がある。そこで教科の枠を超えて英語科と音楽科が協働して指導することが望まれる。

英語科は、歌詞の正しい発音と英文の意味を理解させる指導を担当する。3で分析したように、「Let It Be」の歌詞に使われている単語は短く、また難しい語はほとんど含まれていない。また、英文は、中学校3年で学習する文法事項の理解で十分である。

英語科の指導の後、音楽科は作曲者の意図を理解させ、歌詞に込められた意味を表現できる指導を担当する。「Let It Be」の音楽の構成はAとBを繰り返すパターンであり、分かりやすい楽曲である。音楽的特徴として、 アウフタクトの曲であること、強拍の単語を意識することで、歯切れのいいテンポのリズムを作り出すことができる。

歌唱指導では、きれいな響きで歌い、表現させることが大切である。そのために曲想や曲の構成を理解し、創意工夫をして歌うにはどうすればいいのかを考えさせて表現できるように指導することが大切である。

英語の歌詞を繰り返し音読することで、文にイントネーションや強弱、テンポやリズムが生まれ、歌詞の意味の理解が深まる。そこから創意工夫を生かした歌唱へと繋がっていく。生徒が創意工夫を生かした表現で歌うために、音楽科では、次の3点を意識して指導することが大切だと考える。

1. 日本語と英語は音素体系が違うため、子音の弁別機能に差があることを理解させる
2. 英語の「音節（syllable）」と日本語の「拍（mora）」の違いを理解させる
3. 英語は日本語と違い、強弱アクセントの言語である

英語科と音楽科が、それぞれの教科の特性を生かし、英語の歌詞の意味の理解や音とりだけでなく、日本語と英語の言語の特徴の違いを意識させながら共通した理解で協働して取り組むことで、歌の表情や表現方法が変化する。

今後、音楽科と英語科でさらにどのような協力体制を組むことができるのか、また、歌を歌う時の姿勢や身体の使い方も声の響きを左右するため、身体の使い方などの技能面の指導についても研究をしていきたい。

［註］

註 1 Readability Formulas, https://readabilityformulas.com/free-readability-formula-tests.php
（アクセス日　令和 5 年 10 月 2 日）

註 2（　）内の数字は、『大学英語教育学会基本語リスト新 JACET8000』に掲載された使用頻度順を表している。brokenhearted は載っていない。

［引用文献］

1) 井上謙一ほか （2010）授業に英語の歌を」『決定版！授業で使える英語の歌 20』開隆堂出版株式会社.3

2) アンソニー・ウォルシュ、オチャンテ・カルロス（2019）「小学校外国語教育におけるリスニング学習法 -英語の歌分析と活動の指導法―」『人間教育』2(11),277-284
https://naragakuen.repo.nii.ac.jp/record/3305/files/OJHE_0211_04_アンソニー&オチャンテ.pdf
（アクセス日　令和 5 年 10 月 12 日）

3) 名渕浩司（2022）「洋楽」に「空耳」でアプローチする歌活動の効果― 高学年児童の歌活動に対する意欲と不安はどのように変化するのか? ― 」小学校英語教育学会誌』22(1),4-19
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jesjournal/22/01/22_4/_pdf/-char/ja
（アクセス日　令和 5 年 10 月 7 日）

4) 高橋美由紀ほか（2021）「外国語活動・外国語科と音楽科の教科横断的な指導「英語の歌」を活用した英語音声教育」『愛知教育大学研究報告、人文・社会科学編 』70,69-77
https://aue.repo.nii.ac.jp/record/7954/files/kenjin706977.pdf
（アクセス日　令和 5 年 10 月 28 日）

5)須田智之（2016）「英語授業における英語の歌・映画の活用法: 本校 66 期生への授業実践を振り返って」『筑波大学附属駒場論集』55,189-198
https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/record/45632/files/UTKR_55-189.pdf　（アクセス日　令和 5 年 11 月 2 日）

6)甲斐順（2018）「「中学校で学習した英語の歌」追調査：高校 1 年生に対するアンケート調査結果の分析から」『兵庫教育大学言語表現学会』34,61-75
https://hyogo-u.repo.nii.ac.jp/records/397
（アクセス日　令和 5 年 11 月 8 日）

7) 時得紀子ほか（2009）「クロスカリキュラムを通した表現の可能性―英語の歌を教材とした創作活動を通して―」上越教育大学『教育実践研究」19,9-18.

https://juen.repo.nii.ac.jp/record/4984/files/jissen19-02.pdf
（アクセス日　令和 5 年 10 月 22 日）
8) 吉田雅子、石塚真子（2023）「小学校教員養成課程における「聴取力」に着目した 英語科と音楽科との連携 —“英語の歌”を用いて—」『大阪体育大学教育学研究』7,79-97
https://ouhs.repo.nii.ac.jp/record/1736/files/OUHS-kiyo　教-7-79-97.pdf　（アクセス日　令和 5 年 10 月 14 日）
9)宮腰宏（2021）「教職を専攻する大学生に対する発音練習、教室英語フレーズ練習と英語活動の実践練習による学生の小学校英語授業への自信の変化について」『岡崎女子大学　岡崎女子短期大学研究紀要』54 ,121-128
https://okazaki.repo.nii.ac.jp/record/352/files/14 宮越先生他データ.pdf　（アクセス日　令和 5 年 10 月 21 日）
10)中田ひとみ ほか（2022)「英語歌の授業活用—実践例と選曲における調査と提案—」『外国語教育メディア学会関東支部紀要』7,55-77
https://www.jstage.jst.go.jp/article/letkj/7/0/7_55/_pdf/-char/ja　（アクセス日　令和 5 年 10 月 15 日）
11) 吉村圭（2017）「短期大学英語教育における映画の活用と授業外学習への動機付け—「映画で学ぶ会話フレーズ」—」『鹿児島女子短期大学紀要』53,69-82
https://kwjc.repo.nii.ac.jp/record/1365/files/014 吉村圭.pdf
（アクセス日　令和 5 年 10 月 15 日）
12) 今村梨沙（2020）「“Authentic Materials” として英語の歌を活用した大学での授業実践：情意フィルター仮説と学習動機の観点から」『同志社女子大学英語英文学会　Asphodel』55,18-205
https://dwcla.repo.nii.ac.jp/record/1878/files/AN00000289-20200727-189.pdf　（アクセス日　令和 5 年 11 月 2 日）
13) 瀧口優（2020）「英語教育における歌の意義と課題」『白梅学園大学・白梅学園短期大学 子ども学研究所研究年報』25,29-37
https://shiraume.repo.nii.ac.jp/record/2395/files/nenpo25_07.pdf　（アクセス日　令和 5 年 11 月 2 日）
14) 時得紀子ほか（2009）「クロスカリキュラムを通した表現の可能性—英語の歌を教材とした創作活動を通して—」上越教育大学『教育実践研究」19,9-18.
https://juen.repo.nii.ac.jp/record/4984/files/jissen19-02.pdf
（アクセス日　令和 5 年 10 月 28 日）
15) 文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成 29 年公示）』,21
16) 前提 15),151
17) 教育芸術社「年間学習指導計画」
https://www.kyogei.co.jp/textbook/jh/jh-r3/dldocument
（アクセス日　令和 5 年 10 月 22 日）
18) 教育芸術社『中学生の音楽 2・3 下』.28
19) 大学英語教育学会基本語改訂特別委員会（2016）『新 JACRY8000』桐原書店,160
20) zosaneigo, 「洋楽和訳解説「Let It Be」マザーマリアとは誰のことなのか？ポールはどんな気持ちで歌っているのか？」https://zousaneigo.com/songs/let-it-be/
（アクセス日　令和 5 年 10 月 28 日）
21) RADIO X (2022)’The heartbreaking true story behind The Beartles’ song Let It Be’
https://www.radiox.co.uk/artists/beatles/let-it-be-meaning-story-lyrics/（アクセス日　令和 5 年 10 月 28 日）
22) Christopher Chase (2004)’Let It Be.’
http://www.learningfromlyrics.org/letitbe.html
（アクセス日　令和 5 年 10 月 28 日）
23) 窪薗晴夫（1998）『音声学・音韻論』くろしお出版,83.
24) 山﨑英明（2022）「日本歌曲における発語法と演奏解釈に関する研究」『目白大学高等教育研究究』28,109-117
https://mejiro.repo.nii.ac.jp/record/1905/files/MUER_28_109.pdf　（アクセス日　令和 5 年 10 月 15 日）
25) 堀田隆一（2012）hellog~英語史ブログ#1021.英語と日本語の音素の種類と数）
http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2012-02-12-1.html
（アクセス日　令和 5 年 10 月 20 日）
26) 堀田隆一　（2012）#31. 現代英語の子音の音素

http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2009-05-29-1.html
（アクセス日　令和 5 年 10 月 20 日）
27) 前川喜久雄 （1998）「音声学」『言語の科学　岩波講座言語の科学 2』岩波書店,29
28) 内山洋子（2001）'Perception of English syllable-initial consonants by Japanese listeners'
博士論文 http://hdl.handle.net/10108/35590
（アクセス日　令和 5 年 11 月 8 日）
29) 米谷毅彦（2022）「声楽における母語以外の理解と応用についての一考察–ドイツ語の音節と日本語モーラに基づく日墺の歌唱指導を事例として–」『岩手大学教育学部研究年報』81,1-18
https://iwate-u.repo.nii.ac.jp/record/15643/files/arfe-v81p1-18.pdf　（アクセス日　令和 5 年 11 月 8 日）
30) 李春喜（2017）「初めての英語発音指導-英語の歌を歌おう-」『関西大学外国語学部紀要』16,61-75
https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/record/10245/files/KU-1100-20170300-03.pdf　（アクセス日　令和 5 年 11 月 7 日）
31) 高橋辰也（2019）「呼吸の仕方と日本語の発音を大切にした歌唱指導：毎日の授業に生かせる歌唱指導のあり方」『洗足学園音楽大学教職課程年報』3,61-71
https://senzoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1095&item_no=1&page_id=13&block_id=21
（アクセス日　令和 5 年 10 月 16 日）
32) 前提 15),99-100
33）橋本エリ子（2019)「音楽教育における声楽教授法の研究—アクティブ・ラーニング形式による発生・声楽指導を中心に—」『福岡教育大学紀要』68(5),1-15
https://fukuoka-edu.repo.nii.ac.jp/record/1706/files/5-01-　橋本 エリ子.pdf
（アクセス日　令和 5 年 11 月 7 日）

［参考文献］
1) ガハプカ奈美（2021）「歌唱における発声指導について一合唱指導のあり方—」『京都女子大学発達教育学起用』17,121-129.
http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/3169/1/0080_017_012.pdf
（アクセス日　令和 5 年 11 月 6 日）
2) 鶴田昭則ほか（2014）「音楽科教育における歌唱指導の研究—幼稚園，小・中学校，高等学校に共通する内容を中心に—」『茨城大学教育学部紀要(教育総合)増刊号』,67-84
https://rose-ibadai.repo.nii.ac.jp/record/16889/files/201400109.pdf
（アクセス日　令和 5 年 11 月 6 日）
3) 橋本エリ子（2022）「主体的・協働的・創造的な歌唱指導法に関する研究」『福岡教育大学紀要』.71,13-30
https://fukuoka-edu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2510&item_no=1&page_id=13&block_id=21
（アクセス日　令和 5 年 11 月 8 日）

［教科書］
『New Horizon 1』（2021）東京書籍
『New Horizon 2』（2021）東京書籍
『New Horizon 3』（2021）東京書籍
『中学生の音楽 1』（2021）教育芸術社
『中学生の音楽 2・3 上』（2021）教育芸術社
『中学生の音楽 2・3 下』（2021）教育芸術社